

巻頭言

総合文化研究所長 沼野恭子

いきなりきな臭い話で申し訳ないが、二〇一九年八月、日本政府が「輸出管理の優遇対象国」から韓国を外すと決定したとき、韓国のムン・ジェイン大統領がそれに対してすかさず「盗人猛々しい」と応答したと報じられた。元徴用工裁判がらみの複雑な問題で両国関係の緊張が一気に高まった場面である。このとき私は、前年の七月にポンペオ米國務長官が北朝鮮を訪問して「約束したはずの非核化の実現」を迫ったところ北朝鮮側に「盗人猛々しい」と反論されたというニュースを思いだし、南北がはからずも同じ表現を使ったのか、それとも朝鮮語ではよく用いられる表現なのかと不思議に思った。件の言いまわしは「적반하장 (賊反荷杖)」。

その後、この表現の翻訳をめぐるネット上で盛んに議論が繰り広げられた。原義は「賊が逆に杖を持つ」で、そこから「過ちを犯した人が居直って善良な人を責める」という意味になったという。一方「盗人猛々しい」という訳語は日本語としてかなり強烈な印象を持つ。私は朝鮮語がわからないので正確にニュアンスを比べることができないが、どうやら相手を批判する言い方であることはたしかでも「開き直り」「居直り」「主客転倒」などと訳せば足りるという見解が妥当であるように思える。「盗人猛々しい」という日本語のきわだった突出感、必要以上に戦闘的なのではなかるうか。現に、日本の政府高官はこれを聞いて「品のない言葉で異常だ」と反感をあらわにしたが、朝鮮語では四文字熟語を使うのは教養ある人で、原語に下品なニュアンスはないというから、翻訳自体が反感を煽った形になってしまった。

比較文学者のエミリー・アプターが著書『The Translation Zone: A New Comparative Literature (邦訳は「翻訳地帯——新しい人文学の批評パラダイムにむけて」 秋草俊一郎・今井亮一・坪野圭介・山辺弦訳、慶應義塾大学出版会)』で「戦争とは、翻訳不可能性や翻訳の失敗の状態がもつとも暴力的な極限に達したものである」という大胆なテーゼを提起している。そうだとしたら、ことばや文化に日々携わっている私たちは「翻訳の失敗」に目を光らせ、戦争のきつかけになり得る「暴力的な極限」状態を打開しなければならぬだろう。もとより、それは他人のいわゆる「誤訳」をあげつらうことではまったくない。そうではなく、他者のことばや文化の微妙なニュアンス、その歴史的文脈に対する敬意をよりどころに、他者を深く理解しようとする営為を粘り強く続けていくことにほかなるまい。

本学の研究者の研究領域こそまさに、「翻訳可能なものはない」という翻訳不可能性の絶望的な達観と、「すべては翻訳可能である」という楽観的な希望との間に横たわる広大な「翻訳ゾーン」なのだから。